

第2節 市域の概況

2-1 地勢

本市は、東経 135 度 35 分 58 秒から 135 度 22 分 22 秒、北緯 34 度 35 分 11 秒から 34 度 46 分 08 秒に位置し、わが国のほぼ中央部にあり、面積は 225.30km²（国土地理院：平成 30 年全国都道府県市区町村別面積調（平成 30 年 10 月 1 日時点））である。

西は大阪湾に面し、南は大和川で堺、松原の両市につづき、北は神崎川を隔てて尼崎、豊中、吹田、摂津の各市に連なり、東は守口、門真、大東、東大阪、八尾の各市に接し、いわゆる摂河泉の連山が起伏をめぐらす大阪平野の要地を占め、近畿地方の海陸交通の要衝をなしている。

本市の中央部からやや東寄りを南北に縦貫する上町台地は、南北 9 km、東西 2 km にわたる台地（最高 O.P^{※1}+25m）で、東側にゆるく、西側に急斜をなしているため、本市の東部は概して地盤が高く、西部にいくにしたがって低くなり、やがて海に連なっている。そのほとんどは、淀川、大和川などによって運ばれた土砂により形成されたため、概ね軟弱であり、また市街は概ね平地であり、そのうち O.P + 3 m 前後の低地（朔望平均満潮位^{※2}は O.P + 2. 1 m（台風時は O.P + 2. 2 m））が大部分を占めている。

また、本市は、「水の都」の名にふさわしく、大小多数の河川が市内を縦横に貫流しているが、その根幹をなす淀川は琵琶湖に源を発し、宇治川、桂川、木津川の三流を合して水量が豊かである。この淀川は、本市の東北部で分流して淀川本流、旧淀川（大川、堂島川、安治川）、土佐堀川、尻無川、木津川等となってそれぞれ大阪湾に注いでいる。

※1 O.P. (Osaka Peil)

大阪湾最低潮位面の意。大阪湾の工事基準面を定めるため、明治 7 年の最低 潮位を O.P ± 0.0m と定義。大阪湾の海拔高度の基準となる高さ。（O.P.=T.P.+1.30m）（東京湾平均海面（Tokyo Peil : T.P.））

※2 朔望平均満潮位

満月と新月の、大潮の際の満潮位の平均

2-2 地質

大阪平野は、約一千万年前には大阪湾の一部として瀬戸内海の東部に位置していたが、数百万年前から六甲、生駒、和泉山脈などの隆起や淀川及び旧大和川などによる堆積作用により現在の地形が形成された。

本市の地質としては、大阪府南部の泉北丘陵の北端である上町台地における砂礫層からなる古期洪積層と、その他の地域での粘土と砂の互層、海底粘土層及び砂層からなる沖積層とに分類される。

2-3 市域に影響を与える地震

本市域に影響を与える地震には、次の 2 つのタイプが考えられる。

一つは、駿河湾から遠州灘、熊野灘、紀伊半島の南側の海域及び土佐湾を経て日向灘沖までのフィリピン海プレート及びユーラシアプレートの境界で発生するタイプで、地震の規模（マグニチュード）が 8 を超える巨大地震である。昭和 19 年（1944 年）に発生した東南海地震や、昭和 21 年（1946 年）に発生した南海地震がこのタイプにあたり、この地震が発生したときの本市域での震度は 5 弱～6 弱程度で、大阪湾には津波が襲来すると想定される。（このタイプの地震は、その発生のメカニズムから、プレート間（海溝型）地震と呼ばれている。）

もう一つは、陸域で発生するタイプで、地震の規模（マグニチュード）は、7 を超えることもあり、「平成 7 年（1995 年）兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）」が、その代表的な例である。日本の内陸部の浅い地震は、プレート相互作用の影響を受けて大陸プレート内部で発生しており、内陸（地殻内の）地震と呼ばれている。

なお、災害想定を行った活断層[※]等の位置は下図のとおりである。

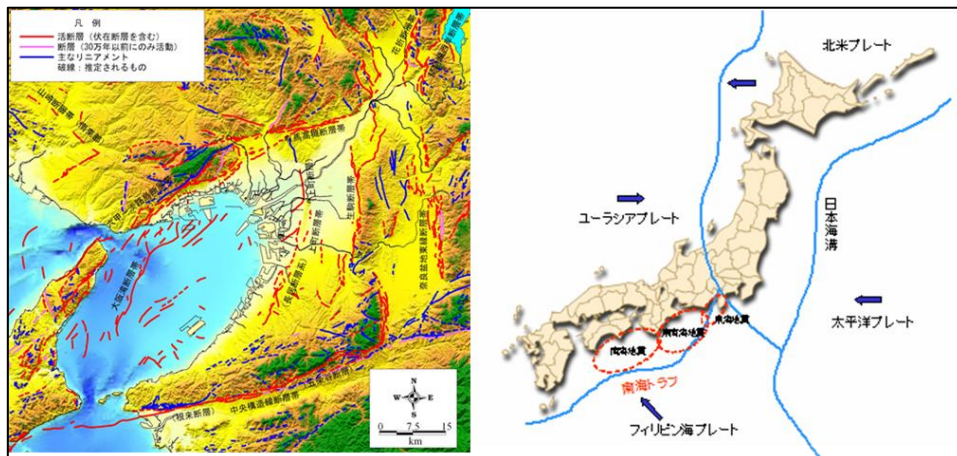


図 災害想定を行った活断層等

(出典：大阪府地震被害想定調査（大阪府自然災害総合防災対策検討（地震被害想定）報告書）（平成19年3月）Ⅱ ハザードの想定）

※ 活断層：最近の地質時代に活動し、今後も活動する可能性のある断層

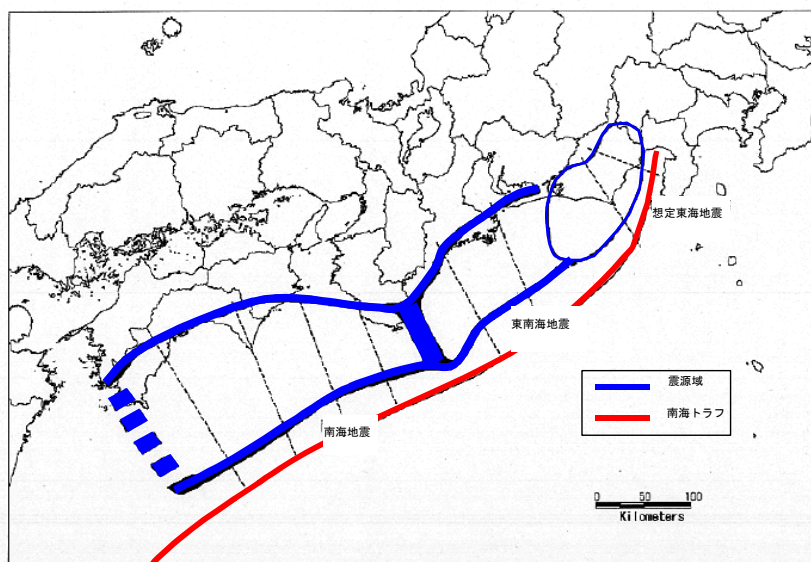


図 東海、東南海、南海地震の想定震源域

(出典：内閣府「東南海・南海地震 対策の概要」P6 より一部加工)

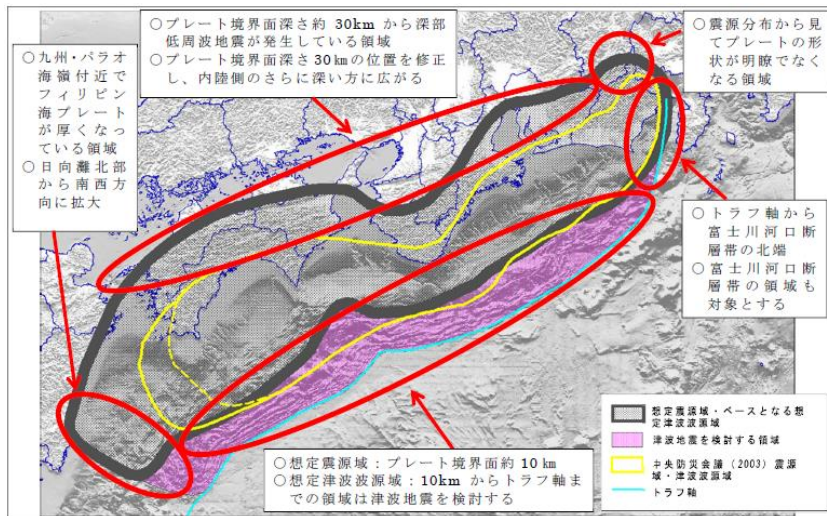


図 南海トラフ 新たな想定震源域・想定津波波源域

（出典：内閣府「南海トラフの巨大地震モデル検討会について 中間とりまとめ」（平成23年12月27日）公表 P50）